12　左御紋の始まり

そんなことあったかなかったか知らないがね。薩摩は、初めはね、垣花（かきのはな）から船で攻め込んで来たわけさ。こっちはもう、首里が近いでしょう。警備が厳重でね、上陸出来なかったって。それをまた迂回して、本部半島の向かいから入って来たわけさ。運天港。運天港から攻めて来て。そして、琉球藩はもう薩摩にやられたわけさ。その時の沖縄の戦の大将は、謝名テイロウといって、まあ総司令官だった、沖縄の。その人は薩摩に捕まえられて、向こうに連れて行かれて。

それで、その時にね、薩摩は鉄砲があるわけさ。琉球はもう空手でしょう。普通は武士は刀を持っているが刀を使わん、戦は。もう空手で。だからこういう言葉があるさ。沖縄ではね、棒、棒といったら鉄砲のことやった。担ぐ天秤棒も棒じゃがね。鉄砲という言葉が分からないわけさ、昔は。見たこともないし、また武器もないから。それで、『棒の先からピー（火）が出て、私の腹に当たって死んだ』って。こういう言い伝えがあるって。琉球では。で、また、沖縄はどうするかっていったら、豆叩く場合にね、棒があるでしょう、棒。沖縄では短い柄を使って豆を叩いて殻を落とすわけ。それを使ったわけさ、戦に。それで、薩摩では、『琉球人は中折れ棒で戦（いくさ）する』と。で、また首里は、首里城に攻めて来る時はお粥を炊いて全部道に流して滑るようにして。もう幼稚な話さ。こういう言い伝えがあるわけさ。

それで、散々戦は負けて琉球王も降参して、戦大将の謝名テイロウという男は鹿児島に捕虜で捕まえられて、向こうでいろいろ問い質されて裁判になったわけさ。で、もう武勇が勝れておるからね、ご飯も食べなくても力はあるわけさ。いざ死刑という時に、大きな鍋に種油を入れて、それに投げ込むといってね、薩摩の兵隊が二人でやろうとしたが、もう武士だから、この二人捕まえて、すぐ飛び込んだって。で、ぐるぐるぐるぐる左に回ったって、左に。それでもうしまいだがね、この人は。

それで首里の宗家の紋は左に巻く。これから取って宗家は左御紋と、この紋付の紋は。左御紋の始まりはこれだったそうだ。

字与座　伊敷清保